

特集にあたって

子育て支援の場における参加者の育ちをとらえる

高木 和子

学術フロンティア事業プロジェクト「対人援助にかかわる人間環境デザインに関する総合研究」の中で、「子ども（育ちあい）プロジェクト」として取り組まれているこの共同研究では、解決すべき問題を共有したうえで、参加者が個別の研究課題に取り組むという方式はとられていない。人間科学研究所の前身である教育科学研究所時代からの研究活動の積み重ねに関与してきている、子どもの育ちをめぐる今日的な問題に関心をもつ研究者に参加を求め、それぞれの研究課題に取り組んでもらっている。しかし、個別に研究を進めているのではなく、その過程を、研究協力者として参加している大学院生も含めた場で発表し、討議して成果を共有してきている。個別の研究に関する議論が進む中で共通して浮かび上がってくる「人間理解の視点」を見出し、それを核としてもう一度それぞれの研究における議論を再構築して行くことが目指されているのである。

研究のフィールドをひとつに絞り込んで、明確な目標をもった研究計画をつくって目的に沿った成果をあげる、というのが学術研究としては理想的な姿ではある。しかし、現実問題として、それぞれ個別のフィールドを持ちながら研究活動を継続しているものにとって、共通の場を設定することはかなり難しい。特に「子育て支援」の場には、いくつかの色合いがあり、それぞれの課題がある。そこで、この5年（実質は4年弱）は個別のフィールドからの研究をとおして考えるという形にしてみたのである。それができたのも、これまでの積み重ねの中で、共有された概念がある程度の枠組のなかに収まってきていたためである。

われわれの研究関心は、生涯発達という視点を基点にして、発達の間を社会生活における学びの領域に広げて考えることにあった。そしてその後の研究の過程で「社会生活における学びは、参加者同士の相互作用によって成立するものである」ことに中心を置くことによって、生涯にわたる個性化の過程を社会的相互作用理論の枠組をもちいて明らかにできるという方向性がみいだされてきた。

家族や仲間、職場や地域などの社会生活における学びには多種多様なものがある。子育て支援の必要性が生まれる場や、支援による学びの場にも多様な相互作用が展開されている。そこでは、参加する全ての人々にとっての学びと発達を可能にする活動がみられている。今回発表されるのは個々人のフィールドでの研究であるが、今後の研究会活動をとおして一つの枠組で議論することになる。その結果として、いくつかの課題に解明に向かう道筋がみえることを期待している。